

日本人患者からの弔辞

荻田先生と初めてお会いした時の事は、今でも忘れません。周産期外来診察室のベッド上でした。私は受診中でしたので、ベッドに寝転び臨月近い大きな大きなお腹を丸出しという姿です。「はじめまして。こんな姿ですみません。宜しく願います。」と服を直し起き上がろうとする私に「いえいえ、いいですよ。そのまま寝ていて下さい。早速、お腹の赤ちゃんを見させて頂きますね。」こんな感じで荻田先生と当時胎児だった息子は出会い、治療が始まりました。

他院で妊娠 28 週のエコー検診の際、胎児の異常が発見され府立医大病院に転院、帝王切開出産に向けての準備に入ろうかというあたりの診察日であったかと思えます。それまで私が産婦人科のドクターから聞かされていた子供の状態および病気に関する話は非常にシビアなもので、「逆子・臍の緒が首にぐるぐる巻き付いている・低体重」「染色体異常の可能性が高く、もしそうであれば生まれてきても 3 ヶ月程度の命。治療の施しようはない・・・etc」今思えば、あくまで最悪の可能性、覚悟を持てるようにして下さっていたのでしようが、その頃の私には重すぎて・・・思い悩み不安で泣いてばかりの日々を送っていたのでした。

先生は、矢継ぎ早に質問を投げかける私に、胎児はかなりの高い確率でリンパ管腫であるという事。もう少し早く診ていれば胎内治療も可能であったが部位が腋窩なので、私たちのケースは出生後の治療でも問題ないという事。ただ他部位にも患部がないとは言えないので、どんな状態であったとしても、出生後速やかにしかるべき処置が取れるよう、出産には立ち会います。と、質問の答えだけではなく、「安心感」をも与えて下さいました。それがどんなに心強く感じたことか。

そして、ご多忙なスケジュールを調整頂いた 2000 年 8 月 15 日の手術当日。手術室には産科のスタッフの他にも、小児科 NICU と小児外科の方達、びっくりする程たくさんのスタッフがスタンバイして下さっていました。しばらくして、荻田先生の姿も見えホッとしました。

いよいよ出生の瞬間、皆が私の足元へ。そして、次は素早く子供と共に処置台に移動。処置が続きます。期待していた「おめでとうございます。何時何分生まれ、男の子ですよ。」なんてものはちっともありません。私には、ほんのチラッとだけ見えた姿と泣き声だけ。必死に目で追っていました。もしかして、状態が良くないの？見せて貰えないの？と思ったそんな時「早くお母さんの傍に赤ちゃんを連れて行って！」との声。荻田先生です。顔の横に連れてこら

れた息子は、既に泣き止んでおり、生まれたばかりだと言うのにしっかり両方の瞳を開けて私を見てくれました。その隣には先生の微笑。それから「赤ちゃんは大丈夫ですよ。心配ありません。」の言葉を聞いた後、引き続き卵巣の手術を受けた私は全身麻酔に切り替わり徐々に意識を失っていったのでした。

左腋窩と腕にリンパ管腫があったものの、お蔭様で染色体にも問題は無く、生後すくすくと育ちました。出生後4ヶ月目から、OK-432局注治療を始めたのですが、息子の治療は先生をかなり手こずらせていたと思います。赤ん坊の頃から、本当に殺される！というかの様な大泣きに大暴れなのです。点滴の針を刺すのも一苦勞。何人ものスタッフが助けに来て下さって、ちょっとした大騒動です。おまけにかなりの過敏で麻酔や睡眠薬も効きにくいらしく、なかなか眠らない上にやっと眠っても針先が当たっただけで、起きてしまい暴れ出します。「凄いな～。ここまでの子は初めてや！」と、毎回、大汗をかかせてしまっていましたね。本当に申し訳ありませんでした。

でも、あれから数ヶ月で息子も随分変わったのです！最初の点滴は嫌がるものの、針が入ってしまえばケロッとしてもう泣きません。そして、なんと点滴をぶら下げて、1階のレントゲン室まで自分で歩いて局注を受けに行けるようにまでなりました。ちょっと前とはまるで別人の様で周囲は大変驚いています。3歳になり「自分が病気であること。治療をしなければならないこと。」を少し理解したようです。是非、荻田先生にも成長した息子を見て頂きたかったです。「この間までは一体何だったんだろうね?!」と、きっと一緒に笑って下さったことでしょうね。

息子の場合、当初の見込みでは、血管腫も混在しているようだが、リンパ管腫の方は嚢胞状の為、すぐに治療効果は現れてくるはず・・・というものでしたが、残念ながら、何度局注を行っても大きな変化は見受けられませんでした。先生も「おかしいですね。もう、そろそろ効くはずなのに。今回は透視下で局注を行って、薬の広がり具合など詳しく確認してみましょう。」という事で、2002年12月に初の透視下での局注となりました。そして、それが先生の治療を受けた最後の日となってしまいました。その日の結果により、一つの袋に注入しても薬が他の袋に広がっていかない事がわかりました。珍しいタイプで、無数にある袋の壁がとてもしっかりしているのです。

「だから、根気よく1つずつ潰していかなければならない。長くかかると思いますが、頑張っていきましょう！」先生が下さった息子への最後の治療方針です。一体息子の治療は、いつまでかかるのか想像もつきませんが、決してあきらめることなく、親子力を合わせて「リンパ管腫」と戦い、また生涯上手く

付き合っていこうと思っております。

荻田先生・・・急な電話やメールでの相談にも、いつだって親身にスピーディにお答え下さいましたね。心から感謝しています。息子が大きくなれば、私は先生のお話をたくさん聞かせることでしょう。私達だけではなく、先生にお世話になった患者、その家族は皆、決して貴方を忘れないでしょう。これからリンパ管腫に苦しむ人々を遠くから優しく見守っていて下さい。

そして、どうか「安らかにお眠りください。」

* * * * *

こういった機会を頂戴し、大変に光栄なのですが、想いがあふれてうまく言葉に出来ません。つたない文ですが、少しずつ思い出を言葉に出来ればと思います。

1992年、私が20歳の時、新聞でカルロスちゃんの記事を見かけたのが出逢いでした。私はその記事ではじめて、自分以外にリンパ管腫の患者さんが実際にいることを知りました。そしてその後、トリアス祭での講演を、私の病气判明以来ずっと診て下さっている主治医が聞きに行き、薦めてくださったのを縁に、荻田先生のもとへ通うことになったのです。はじめてお会いした日は、物静かな先生だなぁとの印象だったのですが…、いつからでしょうか？冗談を言っただけは笑ったり、プライベートな事など色々と相談に乗っていただいたりと、恐れ多くも懇意にして頂きました。

パソコン好きな先生は、当時興味を持っていた私にも是非にと勧めくださり、購入から操作など色々と教えてくださるだけでなく、Eメールのやりとりもさせて頂きました。何十通と交わしたメールを今読み返してみると、なんと病气以外の内容がほとんどなのです。毎日お忙しいのに2日と空けず丁寧な返信を下さいました。

私が旅行好きなのもあって、よく旅の話もしていただきました。しかし先生はお忙しい身、旅といっても学会や治療など、お仕事でのお出掛けがほとんどでしたが…。海外へ行かれた折には、その地のこと、人々の暮らし、歴史的背景と様々なお話をして下さいました。なかでも特に印象深かったのがマヤの話でした。

「遺跡に描かれたマヤの人々の顔付きって何か不気味とは思いませんか？メ

リダ市にはマヤの末裔がたくさん生き延びています。そしてマヤ語を今も話しています。遺跡の人々とやはり似た顔付きをしています。話しているとそれなりに人なつつこいのですが、絵にするとやはり遺跡の人のような顔付きを思わせませす。…今のマヤの人々はスペイン人に征服され、抑圧された民族です。それでも民族の言葉・習慣・文化を守りながら子々孫々それを継承しています。そんな姿に心打たれるのでしょうか。人としての DNA は共通なのに民族によって微妙な差異がでるのが本当に不思議です。その辺のことはまた私が考えてきていることを話してみたいと…。」

この話は途中までしか聞けていないこともあり、心残りです。

私が長崎に旅行へ行き、原爆資料館を訪れたことを話したときには、長崎は何故雨が多いのでしょうか？地形が大きな原因をなしているように思うのですが、気象予報士ならこの事をきっと上手に説明することでしょう。でも、そんな科学的な説明より、原爆で被害にあった痛ましい犠牲者をきっと今も天が悲しんで涙をながすから、と説明する方がいいのかも知れません。…原爆は戦争終結のために投下する必要性はなかったのに、政治的な意味合いや実験的な意味合いで日本に投下されました。イタリアやドイツには投下されませんでした。肉体に受けた傷は目に見えますが、民族に対する侮辱に我々はあまりに鈍感なように思います。外国に行ったときに時々質問されます。『日本人は今でも米國を嫌っていますか（嫌っているでしょうね）？』今の日本の現状をみると私は返答に困ってしまいます。焦土と化した街並みは復興しても、民族の心は様変わりしています。被爆者の遺伝子に刻まれた傷は時限爆弾となって子々孫々その傷を伝えていくことでしょう。…昔の医師は患者さんと色々なことを話し合ったそうですが、今は、特に大学病院などにいると、そういった人間的なつき合いが出来ていないなあ〜とつくづく思います。E-メールというのはそういった意味で大変有用と思います。」

また毎年苦しまれていたご様子の鼻アレルギーについては、「小児外科には濃いアレルギーがあるようで、毎外来日は苦勞しています。…アレルギーの元は、『せわしない日常』かもしれません。いつまでも悠久の時間の中に身を置っておきたいのに、現実への抵抗かも…。私はそれでも“聞き分けのある子供”を演じる努力をしています」とも話されました。

また、本題である病気の話に関連して、医療現場について教えていただく機会にも多く恵まれました。これは薬学を志す私にとって大変勉強になることばかりでした。

結婚・妊娠・出産と、人生最大の岐路で不安や悩みを抱える私の背中をやさしくポンと押して下さったのも先生でした。結婚のときは、「花嫁の父親の心境」と言いながら、式当日は温かいメッセージを届けて下さいました。その後、子供に恵まれたのですが、妊娠中や出産の時には、言葉では言い尽くせないくらいお世話になりました。先生の診られるたくさんの患者さんの中でも、妊娠・出産を経験するのは私が初めてということでしたが、検診のたびエコー写真を見て、楽しみにして下さっていました。

うまくいけば先生のお誕生日と同じ6月20日に出産できる予定だったのですが、誘発入院したもののうまく進まず結局、翌日の出産となりました。そして、これは私も最近聞いた話なのですが…。結局帝王切開となり、手術室に入った頃、分娩ホールに明らかに産科関係者ではなさそうな、誰かを捜す様子の医師を見かけたと、夫が言うのです。夫は荻田先生とは2度ほど会っているだけなので確かではないけれど、きっと荻田先生だったんじゃないか、と。今となつては確かめることは出来なくなりましたが、私も荻田先生が来て下さったと信じています。出産のちょうど1年前に親不知の抜歯をしたのですが、リンパ管腫で安全な抜歯が困難なため手術となった時、最初から最後まで長時間になったにも関わらず立ち会って下さった、そんな優しい先生ですから…。

出産後はすぐ病室に来て、一緒に子供を見て下さいました。その頃はまだ新生児室の中だったのですが、その後、子供を連れて受診に何うと必ず最後に「さ、抱っこさせて！」と言って抱いてくださり、いつも大変にかわいがって頂きました。

先生がいらっしゃらなければ、こうして暉人（あきと）に会うことはなかったかもしれません。「今は様々な育児本があります。参考にはなるが、全てがあてはまる訳ではありません。その子なりの成長をしっかりと見つめて育てられる、たくましい母親になって！」産後すぐに頂いたメールです。今、毎日この言葉を励みに子育てに奮闘中です。この子が大きくなったら必ず、先生の話をお聞かせようと思っています。

先生に抱っこしてもらったことは、彼は憶えてはいないでしょう。しかし私の心には、彼を抱っこする先生の姿がはっきりと残っています。実直で、優しく、こんなに素敵な、お母さんにとってとても大切な人がいたことを、その記憶とともに将来、彼に話したいのです。そして、出逢いの素晴らしさを知ってもらいたいのです。

そして、私だけでなく多くの患者さんが先生を慕い心から頼りにされている

ことが、身をもってわかります。「手のかかる患者さん」と、私はよく先生に言われました。本当に何から何までお世話になり、手を煩わせっぱなしの患者でした。病気治療の先生としてだけでなく、同じ医療の道を導いて下さった大先輩であり恩師として、このお世話になったお返しは、先生にではなく、他に悩む多くの人達にしなければなりません。先生ならきっとそうおっしゃるでしょう。私は、微力でも自分の出来ることから何か恩返しをしていこうと思います。

私はリンパ管腫とともに生まれました。そして一緒に育って大人になりました。幸いなことに母にもなれました。リンパ管腫を診続けて下さった先生方は私にとって親とは別に、ある意味で親以上に大切に思う人です。

その先生が、荻田先生で本当によかった。先生に出逢えて本当によかったです。先生に教えていただいた全てのことが、私の生きていく力となり、大切な思い出となっています。

以前から頼まれていた、先生の活動へのお手伝いのことや、私のこれからの治療のことなど、今となってはお話できないことが多くあり、残念でなりません…。でも、今はただ、感謝の気持ちでいっぱいです。

荻田先生、本当にありがとうございました。

* * * * *

平成11年5月、娘は風邪がもとで、のどにリンパ管腫があることがわかりました。それまで普通に幼稚園に通っていた、4歳半のことです。肺炎を併発したこともあり、地元の病院に2ヶ月入院しましたが、何の治療もできないまま退院になりました。私たち夫婦は、このまま何もしないでいることに不安を覚え、自分たちで調べていたときに荻田先生の海外向けのHPを見つけ、思い切ってメールを送ったのが、荻田先生とのお付き合いの始まりでした。大学病院の先生からすぐにお返事をいただけるとは思っていなかったのですが、メールを送った翌日、それも日曜日の夜中に返事が届き、「画像を送ってくれば、診察いたします」との事。早速画像を病院へ送ると、その結果をメールで連絡してくださいました。「画像診断結果」として送られたメールは、今までのどの説明より分かりやすく、娘の病状がよく理解できる内容でした。そして病気の治療方法、可能性などについても書かれており、まだ会いもしない患者のことをここまで考えてくれるとは、と私たちは感激してしまいました。そして治療のお願いをしたところ、「現状はかなり厳しいものですが、よろこんで最善をつくします」と力強い言葉を頂きました。

そのころの私たちは、突然の娘の病気に暗澹たる思いでいましたが、荻田先生と出会い、その先生の言葉で、一筋の光が指し、この先生なら娘の病気を治してくれるのではないかと、病気に立ち向かう勇気が出てきたのを覚えています。

それから4年間、茨城から京都まではかなり遠い距離ですが、治療を続けられたのも、先生のおかげと感謝しています。遠距離のために宿泊が必要なことから、治療の計画は早く決めて頂き、検査の予約も先生の方で取って頂いたこともありました。治療後の状態や風邪を引いたときなど、何かあるとメールを送ってしまいましたが、その都度必ずお返事をくれ、「何かあったら遠慮なくメールください」と付け加えてくださいました。距離は遠くても、身近な主治医でした。また、最後の治療となった平成14年11月は、「遅々とした歩みで申し訳なく思います」と、先生のせいではないのに、そんな言葉も言ってくださり、改めて先生の優しさに感謝いたしました。

荻田先生に私たちは何のお礼もできませんでしたが、娘がこれからも病気に負けることなく前向きに過ごすことが、せめてものお礼の気持ちと考え、治療を続けていくつもりです。また、小学生の娘は、将来医療関係の仕事に就きたいとっております。同じような難病の子供たちの力になれば少しはご恩返しになるかしら、と、願っております。

アドレス帳にある先生のメールアドレスをクリックすると、まだその向こうには荻田先生がいらっしゃるような気がします。何かで落ち込んだときは、先生のメールを読み返し、がんばっていきましょうと思います。

荻田先生、本当にありがとうございました。

* * * * *

以下は私が荻田先生に初めてメールを送り、お返事を頂いた時のものです。

「メール拝読いたしました。私どもの治療に興味をお持ち頂き有り難うございます。ただ、海綿状のリンパ管腫で四肢全体に広がるタイプは私どもも治療に難渋いたしております。このようなタイプでは治療の主眼を合併症の再発予防にしております。もし、京都へおこし頂けるのであれば、喜んで診させていただきます。」

省略させて頂きましたがこの中には診察の曜日、時間、予約等についても詳

しく記載されていました。

驚いたのは「専門ではないから」という理由で診て貰える病院がない中、多忙な先生のようなし、返事は貰えないだろうと期待せずに出したメールに日をおかずこのように親切なお返事を頂けたことでした。

私が異常に気づいたのは2001年の夏のことでした。息苦しさとお腹の張りを「運動不足で太ったのだろう」程度に考えているうちに日に日に腹囲は増加し呼吸をすることが困難になって来ました。念の為、と健康診断のつもりで撮ったレントゲンでは腹部から胸にかけて多量のリンパ液の貯留が認められました。

様々な病院で検査を受けましたが原因についてはなかなか分かりませんでした。推測ですが、と告げられる病名の中には私を絶望させるものも多々ありました。ところが京都へ初めて伺ったその日に基本的な検査は全て終わり、具体的な病名、治療の方向まで教えて頂くことが出来たのでした。遠くからいらしたのですから、と予約で一杯だったためそこでは受けられない検査をするために近くの病院を紹介して下さいました。

遠方から訪れる患者のために宿泊施設の案内までしておられる先生だということもその日に知りました。

荻田先生の経験の豊富さと知識の深さ、そして親切で謙虚な姿勢にただただ驚くばかりの一日だったことを覚えています。

それから外来と入院による治療が始まりました。入院生活は全部で9ヶ月ほどにもなったでしょうか。その間多くの先生方や看護婦さんにお世話になりました。なすすべもなく途方に暮れていた私にとって身体的なことだけでなく、精神的にも親身になって励まして頂いたことはどんなに嬉しかったことでしょうか。また病気と闘うたくさんの方とも知り合いになり、励まして貰いっ放しの入院生活でした。

闘病生活の中で荻田先生が言ってくださった言葉で忘れられないものがあります。それは「一緒に頑張りましょう」という言葉でした。

先生は診る立場、私は診られる立場、そんな当たり前と思っていた事を、しかし先生はそう思っていないらしいませんでした。両親に後日聞いた話では「なかなか退院の運びとならず申し訳ありません」とまで言っておられたそう

です。先生が悪戦苦闘されていること、私だけがつらくて頑張っているのではないと気づかされた言葉でした。先生も、一刻も早く患者を救ってあげることが出来ないことでつらい思いをされているのだと。

2, 3 日に1回は多量に抜かなければ苦しくてしかたなかった腹水でしたが、何回目かの治療（手術）の結果、腹水の溜まるスピードが日に日に減って来ました。そして退院のめどがついた頃には日常生活に支障のないくらいの程度にまで改善したのです。退院後2年半ほど経ちましたが、今ではもう通常と変わらないまでになっているそうです。

2002 年春、当初の退院予定月を過ぎても病状が良くならない私に荻田先生は「新緑の頃には退院できるように頑張りましょう」と言って励ましてくださいました。そしてその約1年後、患者に不安を与えないよう療養の理由を明かされないまま、そして最後まで諦めずに病氣と闘われた末に永い眠りにつかれたのでした。

荻田先生は常に患者に希望を与えてくれました。思いやりをもって接してくださいました。高名な先生でありながら全く偉ぶったところのない、謙虚で温和な先生でした。後から伺った話ではご自宅でも常に机に向かい患者さんと連絡を取られていたそうです。どこに居ても先生は病氣で苦しむ人々のことを忘れることがなかったのではないのでしょうか。もしも、もっと早くご自身の体調に気づいていらしたとしても、休むことなくお仕事を続けられたのではないか、そんな風に思わないではいられません。

日々健康で普通に生活できることの幸せを、人は忘れてしまう時があります。当たり前前に生活できているからこそ出てくる悩みのなんと多いことでしょうか。大らかに、けれど一生懸命に、希望を持って恐れずに、けれど慎ましく……荻田先生は常に私の中に存在し、大切なことを見失いそうになる時には私にそれを教えてくれるのです。

最後に、世界の荻田先生と呼ばれるほどの方でありながらそんな風に振舞うことのない荻田先生にまつわるエピソードの一つをお話したいと思います。

先生はリンパ管腫の病氣以外の患者さんと関わられることはあまりなかったようでそのせいもあるのだと思いますが、ある患者さんからは「なんや、お父さんとしゃべってはるのかと思ったわ〜。」と言われ、ある時には「さっきすれ違った人が荻田先生やったんかなあ〜？どっかの係の人かと思ったわ。」と言われたこともあります。またある時は一度も話したことがないのにエレベーター

で突然ねぎらいの言葉をかけて貰ったけど、あれが荻田先生だったのだと最近知ったよ、とスタッフの方が教えてくれたことがありました。

先生を思い出すたびに温かいものが心にこみあげます。

* * * * *

茨城県に在住しております。患者は5歳になる息子です。出生前の超音波検査で頸部、舌部のリンパ管腫が発見されました。頸部のリンパ管腫が大きいこと、舌も厚く、自発呼吸が難しいと予想されることから緊急の帝王切開で出生しました。幸いに自発呼吸ができ、ミルクも飲めましたが、頸部は嚢胞状リンパ管腫のために大きく膨らみ、舌は全面に海綿状リンパ管腫のブツブツが露出していました。

地元の病院で頸部に OK-432 を局注しましたが、舌部への局注治療は難しく、せいぜい表面をレーザーで焼く程度で、再発を繰り返すので治療できないと言われました。

私は出生当時にインターネットで荻田先生のことを知りました。閲覧できる論文は語学力の乏しい私には残念ながら読むことはできませんでしたが、思い切ってメールを出したところ、すぐに返事をいただき、リンパ管腫について詳しく説明いただきました。その後もメール、写真だけの相談にも関わらず、荻田先生は懇切丁寧に説明いただき、さながら診察室にいるような気持ちになったものです。

地元の病院では素人目にも OK-432 の局注治療は経験不足を感じ、交通費、宿泊費は経済的にも負担でしたが、なんとか荻田先生の手で治療を受けたく、藁をも掴む思いでリンパ管腫治療第一人者の荻田先生を訪ねたのは、息子が2歳になる直前、ちょうど京都は紅葉が盛りの平成12年11月でした。

短い診察時間でしたが、荻田先生のやさしい笑顔、心温まる励まし、丁寧な診察を受け、「思い切って来て良かった」と妻に話す時涙が流れ出てしまいました。

その後入院治療を3回、外来治療を1回行いました。荻田先生はしばしば病室を訪れてくださいました。初めての入院の際の説明で、「きれいになりますよ」と言ってくださった言葉は脳裏から離れません。その言葉があったからこそ、私たち家族は今までがんばってこられましたし、今後も前向きに病気と闘って

いけます。

最後に荻田先生にお会いしたのは平成 14 年 11 月の外来局注治療でした。帰宅後に妻と、「荻田先生、ちょっと元気がなかったね」と話したことを覚えております。経過を報告したメールの回答も、いつになく短い文章で、何か心配なことでもあるのかなと気になっていたおり、体調を崩して休暇を取っておられるとのことを耳にし、一日も早い復帰を心待ちにしておりましたが、かなわぬ願いとなってしまいました。

その後は昨年夏に常盤先生から紹介状をいただき、東京の国立成育医療センターにて治療を受けております。幸いにも主治医の先生が荻田先生と何度もコンタクトを取っていた先生で、府立医大と同様の治療を受け、わずかながらも治療は前進しつつあります。これも荻田先生の残された功績の賜物でしょう。

とても書き尽くせない思い出ばかりなのですが、荻田先生のご冥福を心からお祈り申し上げますと共に、今後リンパ管腫治療の研究が一層躍進し、世界中のリンパ管腫の子供たちが救われますことを願ってお別れとさせていただきます。

最後になりましたが、今までお世話になりました常盤先生を始め、府立医大のスタッフの方々に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

* * * * *

私の息子（現在 13 歳）が荻田先生に治療をしていただいていたのは、もう 10 年も前、3 歳の誕生日を迎えた頃でした。その前年、カルロスちゃんの報道で、京都府立医科大学の荻田先生のことを知り、是非診ていただきたいと関東から通いました。

当時大学病院に行っても珍しい病気だったのに、子供病院の廊下は、同じように顔や首の一部に腫瘍のできたリンパ管腫の子供たちで一杯でした。お母さんたちと話をしてみると、大阪から、四国から、東京から、青森から…と本当に全国各地から荻田先生を頼って来ている人たちでした。

リンパ管腫の治療法を開発された荻田先生の所へは、日本だけでなく世界から、救いを求める声が数多く寄せられていたということを知り、「カルロスちゃんと共に」という冊子を読んで知りました。これは、カルロスちゃん基金に寄付をした後、送っていただいたものです。この冊子から、リンパ管腫の数々の症

例や、基金が出来て、カルロスちゃんが日本に治療に来た経緯などがよくわかりました。また、今読み返してみても、患者さんやその親御さんに対する荻田先生のお気持ち、他人の痛みを自分のことのように感じて、自分にできることはしてあげたいという先生のお人柄が偲べれます。

荻田先生は、とても穏やかで、優しい声をしていて、落ち着いた話し方をなさいました。私が、不安な気持ちから色々まとまらない質問をしても、丁寧に聴いて答えて下さり、お人柄の誠実さと温かさが伝わってきました。

私は、子供がお腹にいるときに腫瘍が見つかり、もし悪性だったら生まれてもすぐに死んでしまうかもしれない、生きられたとしても大きな障害が残るかもしれないという状況で子供を出産しました。生まれてきて良性のリンパ管腫とわかり、ほっとしましたが、外見上の問題をどうするかということで、幾つかの病院を廻りました。リンパ管腫が感染を起こし、気管を圧迫して呼吸困難になり緊急入院といった出来事もありました。ガンのように直接命に関わる病気で闘っている子供の親に比べたら、自分は恵まれていると思いつつも、藁をも掴む心境だったと思います。そんな中で荻田先生と巡り逢えたことは、本当に幸運でした。

混合型のリンパ管腫で、治療は回数を重ねることが必要でしたが、子供に物心が付いてくると治療に通うのも難しくなったので、途中から経過観察に切り替えました。成長の過程で、感染が起こったり心配なことがあったときはお電話をさせていただき、先生からアドバイスを受けました。

最後に診ていただいたのは、3年前になります。京都駅は、古都のイメージとはかけ離れた、現代的な建物へと目まぐるしく変わっていましたが、荻田先生の温厚さはそのまま、安心感と信頼感を感じさせてくれました。

「カルロスちゃんと共に」のあとがきに、先生は、こう書かれています。「子を慈しむ親の愛情に、そしてその姿に共鳴する人々の心情に、言葉や、国や、宗教などによるちがいはありません。…しかし、外国に生まれたリンパ管腫の子供は、特効薬の存在さえ知らず死に脅え続けています。最新の治療法を知るのが遅かったために、失われなくてもよい掛替えの無い命が召されています。貧しい家の子は、満足な治療も受けられず、死んで行くしかありません。

研究によって、僅かの望みしか与えられなかった病気が、治す事が可能な病気となっています。研究の成果は病に苦しむ全ての人々が享受できるように努力しなければなりません。…」

荻田先生の患者さんへの思い、子を持つ親への思い、人として貫かれた生き方が、国境を越え、実際にカルロスちゃんとそのご家族に救いの手をさしのべる行動へとつながりました。そのことがマスコミに取り上げられて、日本中の、リンパ管腫という難病を抱えた子を持つ親に、希望が与えられました。本当に有り難いことだと思います。でも先生は世界中の人から頼りにされてご多忙だったのではないのでしょうか。ご家族の方の胸中を思うと言葉がありません。

今、改めて荻田先生に深い感謝の気持ちと共に、心よりご冥福をお祈り致します。

* * * * *

荻田先生から教えられたこと

私は、遺伝性の多発性血管腫で、二人の息子たちと共に、約9年の間、荻田先生の局注療法を受けてきました。

先生とは、たまたまの出遇いでしたが、それは私たちにとっては本当に有ることの難しいものだったと思います。

血管腫という病気は一般的なものですが、私たちのように、代々の遺伝性でかつ体中のいろんなところに多発し、しかも痛みを伴う血管腫というのはあまり例がないようで、私は長い間、まともに悩みを受けとめてもらえるドクターに会えないでいました。

その点で、荻田先生とは、よくコミュニケーションがとれたと思います。医師と患者として対等に、出口の見えない治療に向き合うことが出来たと思います。そして、たとえ治療に効果が認められなくても、「では次はどうしていったらいいか」ということを、私たちが受動的になることを求めるのではなく、自分と一緒に考えることを厭わない方であったことに、今さらながら敬意を抱いています。先生とのやりとりの中では、それは当たり前のことでしたが、本当はなかなか得難いことであることを、私は重々承知していました。だから、何年か前、ある時の治療の帰りに、先生に言ったのでした。「先生、絶対に死なないでくださいね！！」と。それは、もしも先生がいなくなったら、親子で途方にくれるに違いないことが、なんとなくわかっていたからでした・・・。

一昨年暮れ、突然退職された時は、ちょうど、長男がすごく調子を悪くし

ていて、入院したり、頻繁に外来に通っている時だったのですが、既にあの頃、ご自身が重く患っておられたのでしょうか、今から思えば、お顔色がすぐれなかったり、寒くない日に、一人だけ厚いセーターを着込んでおられた姿が脳裏に焼き付いています。そんなお姿に、なんとなく不安を覚えていたのですが、まさか、突然休職されることになるとは思いませんでした。

本当はずっと前から具合が悪かったのに、先生はぎりぎりまで仕事を続けておられたのですね……。無理をせずに早く休んで体を治してほしかった、と思うのは患者のエゴでしょうか……。年が代わって、季節が新しいのちの芽吹きを感じさせる頃になっても先生が復帰されないことに、私の中で深刻な予感がよぎり始めてはいましたが、それでも、必ずいつかまた、いつもの笑顔に会えると信じていました。だから、息子や私の治療も、先生の復帰を待って、ずっと中断したままでした。

けれど、私たちの願いは叶わず、私たちはかけがえのない大切な人を失う悲しみに耐えなくてはならなくなりました……。

私は、先生にはその死によって、人間として、大切なことを教えられたと思っています。

それは、

人間は、たとえどんなに社会から必要とされる、有益な仕事をしている人であっても、死とは無縁ではない、ということです。若くても、充実した仕事をしている最中の人であっても、死は人間の都合を越えてやってくるということ。人間は、生まれる時も死ぬ時も自ら選ぶことはできないという真実……。

先生の死は私自身の身に、その真実が我が事として、圧倒的なリアリティをもって迫りました。

そして、

「あなたは、生きている間に、どんな仕事をしていくのか？」

「本当に大切なことは何か？」

「今のよう生きていていいのか？」

「人間は、いつ死ぬのかわからないんだよ。」と、

荻田先生から、そう問いかけられている気がしてなりません……。

今も私は、荻田先生の死は信じられません。どこか遠くに誰かを助けに行かれているだけのような気がしています。それでも時は過ぎてゆき、私たち親子はこれからも病気と付き合いながら、生きていかなければなりません。その中で私は、荻田先生の仕事を引き継いでくださった常盤先生に感謝するとともに、

常盤先生との出遇いを大切にしていきたいと思っています。そして、親子共々この身をたくましく生きていきたいと思っています。

荻田先生、本当に有り難うございました。

* * * * *

私たちが荻田先生に初めて出逢ったのは、平成9年12月の終わり、今から6年前の冬。その日の京都は寒く、雪が降っていたのを今も覚えています。

その1ヶ月前、兵庫県の明石市の総合病院で息子は生まれました。生まれてすぐ、小児科の先生から「右耳の下が腫れている。リンパ管腫かもしれない。京都の病院でリンパ管腫専門の先生がいらっしゃる。その先生に診てもらってはどうか？」と言われました。

“リンパ管腫”初めて聞く病名でした。どんな病気だろう？悪性のもので治らないんじゃないか？命にかかわるような病気だろうか？手術しなければならないのだろうか？不安は募るばかりでした。

生後1ヶ月の子どもを抱いて診察室に入ってから、不安と緊張で私は体じゅう冷や汗でびしょりでした。でも荻田先生を一目見て、大学病院の先生という固苦しいイメージとは違って、純朴で人なつっこそうな風貌に少し安心しました。MRIを見ながらの説明も素人の私たちにわかりやすく説明してくださいました。

治療は右耳の下、リンパ液が溜まっている場所に薬を注射する方法です。まだ幼児なので注射する前に寝かせてから注射するのですが、寝ていても、注射針を刺した瞬間、痛さに起きてしまい暴れるので体はテープで固定し、その上、泣き叫ぶ子供の手足を主人と私で押さえて注射してもらいました。その緊迫した状況でも冷静に注射し、処置してくださいました。注射をする場所は、頸動脈や静脈が通っている微妙な場所で、ある日先生が注射して下さった後、「場所が場所だけに、ぼくも注射するの気色悪いんですよー」と笑いながらおっしゃった事がありました。それを聞いた時、「え！！大学病院の先生がそんな正直に言ってしまっているのぉー？」と思いましたが、その言葉から先生の人間味あふれる飾らない性格にとっても親しみをもちました。

5年間の間にその注射を15回ほどしたでしょうか？小さい時は、顔がゆがんでいると言われたり、道を歩いていてもじろじろ見られたりしていましたが、

それも今ではあまり目立たなくなりました。先生からも表面部分の治療はほぼ済んだので、これからは定期的に MRI をとって様子を見ようと言っていたので、ひと安心した矢先、先生の訃報をきいたのです。最初はとても信じられませんでした。それは今でも同じです。これからどうしたらよいのだろう。とても不安になりました。私たちだけでなく、先生がいらっしゃらなくなって、いったいどれだけの人たちが途方に暮れるのだろう。これからは先もたくさんの人達から必要とされる先生なのに・・・くやしくてなりません。

先生に治していただいて、私たちの子どもは毎日元気いっぱいお友達と楽しい毎日を過ごしています。

荻田先生に出会えた事は、子どもにとっても、私たち家族にとっても、とても幸運だったと思います。先生に感謝の気持ちでいっぱいです。今思い浮かぶのは、「ほんとは、ぼくも注射するの気色悪いんですよおー。」と、はにかみながらおっしゃったやさしい先生の笑顔です。本当にありがとうございました。

荻田先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

* * * * *

はじめ、荻田先生がお亡くなりになられたと聞いたときには、あまりにも突然すぎ、ただただ漠然とするばかりでした。

初めてわが子がお世話になったときのことを思い出します。わが子の場合、生まれたときには、気にならなかったのですが、生後数日経った日のこと、半身が大きいと判断され、気が動転していたことを今でも思い出します。

その時に、荻田先生の紹介を受けることになりました。初診時に「これはリンパ管腫だね」と言われました。当然ながら、「何？それ？治るの？」との反応でしたが、まずは、病名（腫）がはっきりしたこととで安堵しながらも、これからの治療はどうなるのか。治るのかなど様々な事が頭をよぎりました。何回か経過観察のための通院や形成手術を繰り返すうちに、荻田先生の偉大な功績や人柄についても理解できました。入院中でも回診時のたびに「これで大丈夫だよ」という一言でどれだけ勇気付けされたことか。不安がるわが子にも安心した先生の顔を見るたびに「先生ありがとう」と言うようになり、経過通院時でもあまり怖がることなく、通院できることは親にとって一番の安心でした。完治はしないことも十分に理解できました。 こういったこともあり、「先生に生涯ついていこう」と信賴していたばかりに、今となってはただただ残念でな

りません。

また、わが子には投薬していませんが、リンパ管腫には形成治療以外に投薬による治療薬がない時に、先生が先駆けて治験され、評価、認知されたことは周知の事実であり、先生を理解するうえでも重要な資料でした。このピシバニールの世界的な認知が成されてきたということは、我々患者側からの期待を全身に受けていただき、全力をもって尽くしていただけた先生の人柄そのものだと思っています。

こうして振り返ってみると、不安と絶望感のあった患者側として、考える機会をいただき、この記念誌の発行を起案および推進されておられる実行委員会なる皆様方に、多大な感謝をいたします。

最後に、多忙な生涯を愚直にリンパ管腫に捧げた先生のご冥福を心よりお祈りいたします。安らかにお眠りください。

* * * * *

昨年の荻田先生の悲報は、私たち家族にとって一番悲しく、はじめは信じられない出来事であり、それからは先生の事を思い出す日々でした。

私たちが初めて先生にお会いしたのは、平成12年の秋の事です。長男（当時2歳）のリンパ管腫の治療を地元で続けていた頃、改善されない症状と度重なる小さな我が子への外科手術の繰り返しに、「何か小さな子の体に負担のかからない良い治療法は・・・」と毎日のように情報を収集していた時、先生のホームページ「カルロスちゃんと共に」の小さな難病の子に対する熱心な治療と熱意あるさまざまな取り組みが目にとまりました。

翌日、医療機関の紹介状等も面識も何もない私たちが、突然電話をしたにもかかわらず、先生はお忙しい中、長男の今までの治療経過と症状を聞いて下さり、「遠くて大変でしょうが治療しましょうか」と言って下さいました。その時、私たちはとても救われ、この病気と向き合ってから初めて希望が見えてきたと思いました。

約1ヶ月後、先生のもとへ初めてお伺いしました。「遠くからよくきたね。京都はまだ夏なのでしょう。」と長男に温かい声をかけて下さり、病気のこと・治療のことなどの他、負担のかからない治療時滞在の事まで、初めての私たちに親切に教えて下さったのを印象深く思い出され、病気の子をもつ親の気

持ちがとても癒されるような気がしました。その後、定期の治療でも温かくいつも迎えていただきました。先生のおかげで、今では長男も経過は大変良く、普通の子と何ら変わらず過ごしています。

荻田先生の一週忌と伺い、再び大きな悲しみと先生のお人柄が思い出されるとともに、未だ一部医療機関では認知されていない難病の子どもたちと私たち親・家族のために全力を注いで下さった事に心から深謝し、先生と出会い、治療していただいたことを私たち家族は我が子の成長と共に大切にしていきたいと思えます。

荻田先生、本当に有り難うございます。遙かな地よりご冥福をお祈りいたしております。

* * * * *

私が荻田先生に出会ったのは、私が中学生の頃でした。リンパ管腫の治療の為、海外から来日した子どものニュースを見て、荻田先生を訪ねたのがきっかけでした。私は、生まれつき左大腿部の内側にリンパ管腫があり、5歳と11歳の時に手術を受けていて、傷を増やしたくない・・・という思いは強く、切らなくても治せる方法はある、と先生が話してくれた事を信じて京都まで通う決意をしました。

初めての治療の時、注射を脚に刺すのは想像よりも痛くて必死に痛みをこらえていました。その時に、「痛いやろ、もうすぐ終わりやからな」と、関西なまりの優しい先生の声が聞こえてきました。我慢していた痛みと、初めて行う治療への不安が和らいだように感じたのを今でもよく覚えています。

成長と共に、傷を気にするようになってきた私の相談も真剣に受け止めてくれました。体育の授業でプールに入れないことや、スカートが好きなようにはけないこと、部活で思い切り運動したい事など・・・色々なことを聞いてもらってきました。先生は今後の治療方法として形成などの方法も出来るから傷は消せることなど色々と真剣に教えてくれました。

私も働くようになり、なかなか京都まで行く事ができなくなってきたときには、なるべく近くで治療できるようにと、病院を紹介してくれたりなどの配慮をしてくれました。けれど、よく解ってくれている荻田先生への信頼はあつく、先生に治療して頂きたくて、また京都の病院に通うことにしました。今では、病院に行くことも少なくなる位までに治してもらうことが出来てとても嬉しい

です。

「えらい我慢強い子やな、偉いわ」と褒めてくれていた優しい先生の言葉に支えられながら、諦めずにここまでこれたように思います。私も今年26歳になり秋には結婚することが決まりました。前はあんなに消したかった傷ですが、今は傷を消したいと強く望むことはありません。以前に比べて脚が痛くなる事が無くなった事だけでも本当によかったと思っています。

私は、治療だけでなく、荻田先生の優しい人柄に心から感謝しています。ありがとうございました。心からご冥福をお祈りいたします。

* * * * *

生後2週間位して、大分県立病院にて先天性リンパ管腫と診断される。はじめてのピシバニール治療をおこなう。ただ舌下・首という場所な為、2、3度おこなったが、ここでは治療がこれ以上できないといわれ、京都の荻田先生を紹介される。

京都府立医大にて、生後4ヶ月、はじめて荻田先生に診察して頂く。

リンパ管腫が舌の上にある子や目のまわり、足など色々な場所に出来ている子のMRI等見せて頂く。うちのこの場合、舌下から首につながっている所かなり小さいものが数え切れない程あり、うまく中の水がぬけない様な場所がある為困難のようでした。呼吸を圧迫するところ、声帯、のどの裏の方にまで小さいのが出来ている為、注射器をいれられなく、ましてや切除することも出来ずという状態でした。

まだ小さかった為ミルクも飲めず、ピシバニールを注入すると腫れるので、鼻からチューブを入れてミルクを流したりしました。

3ヶ月に1度位のペースで京都に通い、体の大きさにあわせピシバニールを増やしたりして治療を続けました。

2才位になり、普通食が食べられるようになると、呼吸困難という心配が少しなくなったとはいえ、治療後に腫れが出ると苦しそうなびきで心配な状態が続きました。

親の私達も、数ヶ月すると普通の生活をしていて、子供の変化がわかる様に

なってきた、そろそろ治療をした方がいいのかな？とわかり、首の上部分の腫れ、口の中のもり上がり、出血を見て先生に連絡を入れる様にしました。

3才位になると、子供も自分自身で口の中から血が出たとか痛いと言うようになり、治療も全身麻酔をする方がいいとの事で手術室でおこなうようになりました。荻田先生も、麻酔をする方がゆっくり診られる為今まで出来なかった奥の方まで注射を入れてくれた様子等、お話しして下さいました。

3、4才になると、3ヶ月に1度必ずということではなく、様子を見て半年に1度位でいいかな？というように、急に変化するということは少なくなってきました。入院の際は、県外からということもあり直接先生にお電話し、様子を話して治療をした方がいいという時は予約を入れて下さり、遠方から通っていた私達にとってはとても親切にして下さいました。

現在5才となり、荻田先生がお亡くなりになったこともあり、東京新宿にある慶應義塾大学病院にかわり治療を続けております。

日常生活には特に問題はないものの、発熱や、転んであごのあたりをぶつけると自然に腫れてきたりする状況です。

今年のはじめに一度治療をしましたが、今はリンパ管腫の部分が水ではなく、腫ようにかわってきている所が多くなっていることがわかり、3mm程口の中の部分を切除して、今まで治療したのがどれくらいきいているのか調べてもらっている状態です。

これまで、ひどくならなかったのは荻田先生の適切な治療のおかげだと感謝しております。まだまだ時間はかかりそうですが、荻田先生の後、やっと見て下さる先生が慶應にいらっしゃったので続けて診察を受け、少しでも良くなる様に願って頑張ろうと思っております。

* * * * *

愛加のリンパ管腫が見つかって、はや2年近くが過ぎようとしています。生後1ヶ月の時、首の所のふくらみに気づき、自宅近くの病院で診察してもらい、リンパ管腫ではないかと診断を受けました。今までに聞いたこともない病名に驚き、オロオロするばかりでした。そんな時、診察してもらった先生、自分達ではインターネットでと、荻田先生のことをお聞きし、ほんとにすぎる思いで京都府立に診察に伺い荻田先生にお会いし、「大丈夫、ちゃんと治りますよ」と

いうお言葉を頂き、本当にありがたく思いました。

それから愛加が3ヶ月、6ヶ月の時と2回にわたって治療してもらった結果、10ヶ月の時にはふくらみが消え、治りました。

治療中、入院した時も、小さな愛加を抱え不安な気持ちでいた時、荻田先生はやさしい笑顔で「大丈夫ですよ」といつも励ましていただき安心したのを覚えています。そんな荻田先生にきちんとお礼を言う間もなく逝ってしまわれ、本当に残念でなりません。何とかお礼を言いたいという私たちの気持ちを、看護婦さんが「きっと荻田先生は草葉の陰からちゃんと見ていて下さいますよ」と言われ、なぐさめて下さいました。

あたたかいお人柄で、私たちを助けて下さった荻田先生とお会いできたことをとてもうれしく思います。本当にありがとうございました。

もうすぐ2才になろうとしている愛加。もうあったことも忘れそうなくらいきれいに治り、元気にしています。もう少し愛加が大きくなったら、荻田先生のことをきちんと話して聞かせようと思います。

* * * * *

あまりにも突然に訪れた先生とのお別れは驚きと悲しみでいっぱいです。亡き御霊のご冥福を念じ、謹んでお悔やみ申し上げます。

大阪より先生の元へ通院することになったきっかけは、前通院病院の閉院と時変わらずして親戚が教えてくれた『カルロス基金』の新聞記事です。

四歳より治療していただいた英昭はカルロス君に似ていることから、和製カルロス君として皆様にかわいがっていただきました。

偶然カルロス君とお父さんにお会いする機会もあり、少し話をしたこともあります。そして、息子が苦手だった外国の先生方を交えての診察の日もありました。外国の先生方に説明されている荻田先生は、やはりこの病気での第一人者なのだと感じられました。

息子に学校の事などを聞いてくださる先生にお会いすること、同じような患者さんに会えること、京都の町並みにふれること、診察の際の楽しみでもありました。荻田先生、十年間有難うございました。

* * * * *

ぼくはちいさい時からお世話になっている荻田先生がとても好きでした。
初めてほほに注射をした時はとても痛くて泣きました。
その時はまだ小さかったのでよく覚えていませんがすごく注射を怖がっていた事は覚えています。
そんな時に荻田先生に優しく声をかけてもらいました。
とてもうれしかったです。
それから一年に2、3回ずつくらい病院に注射をうちにきました。
やっぱり注射をうつ前はかなりきんちょうしました。
でも荻田先生の顔を見ると安心しました。
初めて手術の話が出たときはすごくあせりました。
すごくきんちょうしおどおどしていた僕に優しく荻田先生が説明してくれました。
荻田先生が、
「いつしてもいいよ。
決心がついたら手術しよ。」
と言ってくれて安心しました。
そして6年生の夏休みに決心しいろいろ詳しい事を荻田先生に聞きました。
僕が不安になっている時も、
「大丈夫やで。」
と声をかけてもらいました。
そんな何気ない一言が僕にはとてもうれしい事でした。
そんな優しかった荻田先生が亡くなったと聞いた時は涙がでました。
僕が不安になっている時いつも声をかけていただきありがとうございます。
今まで本当にありがとうございます。

* * * * *

先般常盤先生よりお手紙を頂いて中を拝見したところ、荻田先生の思い出や感想をと書かれていました。私共も荻田先生には格別な思い出があります。今日でも荻田先生が亡くなったとは信じられません。荻田先生との付き合いは、捺実が生後9ヶ月頃のことだったと思います。ですから、かれこれ10数年になります。

特に患者や患者の家族の方にも、わかりやすく親切丁寧に納得するような説明をしていらしたのが、今でも頭から離れません。また、海外に渡り幅広く医

療を研究している先生だと感じました。そして海外からの研修医達にも医療について熱心に語っている所を見ていると、医療に対して自分の考え方がはっきりしている先生だと思いました。私共が思ったことは、もう二度と荻田先生のような方は現れないということです。私共も荻田先生に出会えてほんとうに良かったと思います。ですから先生が亡くなったのはとても残念です。荻田先生に心からご冥福をお祈りいたします。乱筆ですが、この辺りで失礼させていただきます。

* * * * *

リンパ管腫は、0歳より発病しました。発病してからの日々は、この病気自体が稀にしか見られないものだった為、特にこれといった治療方法もなく、いくつかの病院を転々としていました。幸運にも小学5年生の時、荻田先生によるリンパ管腫の治療についての新聞記事を見つけ、両親そろって荻田先生のいる病院へ行ったのを、よく覚えています。それから治療をしていただき、月日を経るかなり良くなりました。

荻田先生はいつも笑顔で話をしてくれたり、話もよく聞いてくれたり、常に患者側の立場になって考えようとしてくれた先生でした。荻田先生がいなかったら、私の人生は今と違ったものになっていたはずですが。リンパ管腫を専門に研究しておられた荻田先生がいた事は、私の人生そのものに光を与えてくれました。

どんなに感謝しても足りないほどですが、最後に一言、本当にありがとうございます。

* * * * *

荻田先生へ

京都府立医大病院 こども外来 折戸 千恵子

天国では、いかがお過ごしですか？のんびりとお過ごしでしょうね（笑）

初めて先生に、お会いしたのは覚えてはおられないと思いますが約20年前で、まだ私が看護学生の頃です。忘れないのは小児外科のテストで、「臍帯ヘルニアと臍ヘルニアの違いを述べよ」と出されましたね。何故か今でも覚えています。卒業後も14年間先生とは子供5号と一緒に働かせていただきました。お別れす

る前の1年間は外来で一緒に働きましたね。

物静かで、とにかく患者様にやさしく、偉ぶらずスタッフにも公平で絶対に感情的になられなかったですね。その姿勢には学ぶものが多くありました。

私を含めスタッフに何か頼みごとを言う時は「今日は何時にも増してお美しい」などと言って、看護婦の頬を緩めるなど、かわいいお茶目な面がありましたね。先生の外来日は、勤務交代直後で慣れない私の外来勤務での唯一リラックスできる外来日でした。甘えすぎていて先生の具合の悪いのも気づかずごめんなさい。

遅くまで外来が続きお昼も食べられず、患者さんの差し入れ（本当は頂いては駄目なのですが・・・）の鱒寿司を診察室でかき込むように食べたこともありましたね。美味しかったね。毎日、昼ごはんの後には歯磨きをしに外来に来ていました。そんな時でも、気さくに声をかけてくださいました。うれしかったですよ。

患者様の時間外の電話の問い合わせにも嫌な顔もせずに応対されていましたね。そんな先生だから患者様からの信頼は今さら私が言うことはないですよ（絶大でした。）。また完治して治療が終了した患者様と診察室で記念撮影したことも数えきれないですね。いろいろあり過ぎて書ききれないです。リンパ管腫や治療について、もっと教えてもらえたら思っていたのに・・・

最後に会ったのは、2002年11月8日金曜日助講室でしたね。南米から帰ってからの外来予約について2人で話し合いましたね。「気を付けて行ってきて、また帰ったら、話聞かせてね。お疲れ様」と笑って言ったのに。11月の末電話で「ちょっと休むから頼むね。（大丈夫？）うん」といったのが本当に最後でしたね。ずっと待っていたのに・・・残念です。先生が亡くなられ、先生の偉大さをあらためて日を追うごとに感じています。常盤先生が先生の遺志を継いでいかれますので安心して、天国からみんなを見守っててくださいね。寂しくて本当に残念ですが・・・ありがとうございました安らかにお眠りください。

* * * * *

師 萩田修平先生を悼む

加藤 充純（平成9年卒）

故荻田先生の突然の訃報から、およそ1年の歳月が経った今でも、振り返ると書ききれないほどの思い出が甦る。

荻田先生と初めてお会いしたのは今から8年前の、国家試験に合格し京都府立医科大学小児外科学講座に入局した時であった。リンパ管腫の世界的権威であると聞かされてきた荻田先生は、無口できびしそうな印象であった。しばらくはそんな第一印象と変わらず、話す機会も少なく、質問しても口数少ない方であった。しかし、少しずつ仕事において話をする機会が増えていくにつれ、2年目になるころには公私にわたりとても距離の近い存在となった。冬にはスキーや麻雀も御一緒し、私たち若輩者より精力的にこなされていたことを思い出す。私の妻も以前から知り合いであったこともあり、結婚の報告をした時にはとても喜んで頂きました。また、2年目の終わりに関連病院に旅立つ私たち同期4人に蟹を食べに行き、送別して頂いたこともよき思い出である。

関連病院にいるときも時々電子メールの交換をし、夏には日比君の実家で私の家族と一緒に潮干狩りもしたし、麻雀もした。その時に私の息子を抱っこしていただいたが、泣きだしてしまったため困った顔をした荻田先生が可笑しかった。

5年目に一次出張を終え、大学に戻った私と日比君によくメールや話をして下さった。いつもリンパ管腫を外来で一人で治療していた荻田先生が、時々助手に呼んで下さり、リンパ管腫の治療の考え方を教えて頂きました。自宅に招待していただいて奥さんや息子さんと一緒にバーベキューをし、今までの外国でのリンパ管腫の治療の話や最近凝っているという植木の話などをいろいろ聞かせていただけた。また、5年目の終わりに名古屋への異動を考え悩んでいるときにも、相談に乗っていただいた。付き合えば付き合うほど、味があり、話もしやすく、京都を離れるころには私にとって一番尊敬する医師であると同時に、よき相談相手となっていました。

名古屋市立大学病院に移り、新しい環境で四苦八苦している中、荻田先生が入院されたとのうわさを聞いた。その時は荻田先生のことだからすぐに元気になれるだろう、便りのないことが良い便りだろうと思っていた。名古屋に来て1年がたち、こちらの仕事にも慣れてきて、また日比君の家で潮干狩りでもしながら麻雀台でも囲もうかと考えていた矢先に突然荻田先生死去のメールが届いた。あわてて京都府立医科大学内にいる同期の文野君に連絡をとると、もう翌日には葬儀とのことだった。あわてて休みをとり、用意をして高槻の斎場に駆けつけたのを今でも昨日のように覚えている。棺の中の先生の顔を見たとき、私は荻田先生を仕事の上の師をなくしたという気持ちよりむしろ友人を失

ったかのような感覚をおぼえた。もともと一人で診療に当たることが多かった荻田先生が私と日比君に対してはいろいろ誘ってくれたり、プライベートで遊びの計画を立てたりしているうちに、荻田先生に対してそんな気持ちになったのかもしれない。

思い出の事象は尽きないけれど、出来れば10年後、20年後の医者としての自分の姿を見ていただきたいかった。きっとこの先医師を続けていけば、また壁にぶち当たった私の悩みや迷いを折につけ聞いていただきたいかった。そんな気持ちでいっぱいになった。1年前と同様の悲しみも気持ちも含みながら今、これを記しています。

* * * * *

日比 将人

「4月から国舞（国立舞鶴病院）ですか？私も昭和50年の一年間（卒後4年目の研修）を国舞で過ごしました。思い出の地です。3月中は先生に会えないと思いますので、夏か、冬の蟹の季節にでも訪れたいと思います。その頃の思い出を肴に一杯やりましょう。」国立舞鶴病院（現舞鶴医療センター）へ赴任が決まった僕に荻田先生からいただいた最後のメールです。体調を崩されたとお聞きしていましたが、舞鶴で蟹鍋を囲んで一杯できることを信じていました。しかし、病院を移ってようやく慣れて来た頃、突然の訃報が飛び込みました。その日の前日は当直でなかなか寝られず、深夜3時ごろふと思いつき荻田先生に近況報告のメールをしました。ところが、その日に荻田先生が亡くなったと連絡がはいったのです。これが虫の知らせというやつでしょうか。荻田先生が亡くなったショックと、すぐに復帰するとはおっしゃっていたものの、どうして押しかけてでもお見舞いに行かなかっただろうという自責の念でいっぱいでしたが、今思えば、転勤前の僕に心配かけないようにと気を遣っておられたのですね。本当に最後の最後まで荻田先生らしいままでした。

リンパ管腫という教科書にも詳しく載っておらず、研修医になりたての頃の僕になかなかピンときませんでした。しかし荻田先生と一緒に入院患者さんを診療したり、リンパ管腫の患者さんたちのホームページを閲覧したりしていると、実に多くの患者さんが全国いや全世界に存在し、荻田先生は大変ご高名な先生であることを知りました。身近にこんな偉大な先生がおられたのに、僕がリンパ管腫の入院患者さんの担当となることは少なく非常に残念でしたが、時々先生の外来に顔を出して、外来患者さんの診療のお手伝いをさせていただきました。その中で実に多くのことを学びました。それはリンパ管腫に関する

ものから、医者としての姿勢までさまざまです。

荻田先生とは、仕事以外でも仲良くさせていただきました。夏には海へ海水浴や潮干狩りへいったり、冬には一緒にスキーに行ったりしました。潮干狩り場での先生は暑い中少しも休憩せず、黙々と砂を掘ってアサリを捕っていました。潮が満ちて潮干狩りが終わる頃には捕ったアサリの量はダントツで多かったのを覚えています。スキーに行ったときはこんなことがありました。その日は深夜に出発して早朝に到着。前日の睡眠不足と運転の疲れで車中で寝ていると、「日比先生！ゲレンデが開いたし先に行くで！！」と一人でゲレンデに行ってしまうしました。これもまた休まずにひたすら滑っている姿を後から見付けて驚いたものです。本当に何事にも一生懸命で手抜きしない方です。

荻田先生が亡くなる数ヶ月前にいただいたメールがあります。今思えばいつかは仕事に復帰すると言い張っていた先生が、自分の先が短いことを伝えたかったのかもしれませんが・・・。

「私たちの世代は、いずれ近くリタイアしてゆくので、私の経験や技術そして幾ばくかの知識を誰かに受け継いで欲しいと思っておりますが、今の人達は、あくまでも手術をすることで病気を治そうとする根っからの手術屋さんが多く、局注療法のような内科的で、根気と忍耐のいる方法が好きでは無いように感じています。」それまで外科医を目指して手術にばかり目がいき、勤務先の病院で手術ができないことを悩んだことが馬鹿らしく思えました。もちろん手術が必要な症例もあるし、その方が外科医には魅力かもしれません。しかし、荻田先生はそれぞれの患者さんにあった治療を、その患者さんのことだけを考えて続けてこられました。大学病院ですからいろいろ融通が効かないことも多かったでしょう。ただ患者さんのために。簡単なようで難しいことです。

潮干狩りでもスキーでも仕事でも一緒です。何でも一生懸命やりなさい。遊びで一生懸命になれないものが仕事で一生懸命になれるのか？それが患者さんのためになるのだったら、面倒なことでも、どんなに時間がかかっても、自分の信念を貫きなさい。様々な事を通して、僕に医者としての姿勢を教えてくださいました。

現在僕は京都を離れ、愛知県に転勤となりましたが、荻田先生に教わった技術と知識と医者としての姿勢はどこに行っても忘れません。リンパ管腫の診療にも微力ながら一生関わっていきたいと思います。遠くから見守っててください。今年もまた海へ山へ行きましょう。

* * * * *